

大学図書館の使命とミッションステートメント*

上田直人 (学籍番号 200621307)

研究指導教員：逸村 裕

副研究指導教員：永田治樹

1. はじめに

「ミッション」とは、元々伝道・布教といった宗教的意味を持つ言葉であるが、近年では「ミッションステートメント」として、企業や宗教集団その他の組織の目的・目標などを示す短い声明を意味するようになっている。本研究ではこれを、日本語の「使命(目的)声明」と同義として取り扱った。

2. 研究背景と目的

少子化による学生数減、財政確保の困難、業務委託の進行など、大学をめぐる状況は近年大きく揺らいでいる。このような危機的状況下で、大学図書館の使命・目的・目標を明確に設定し、組織運営を活性化、説明責任を明確化する試みが、欧米の大学図書館では一般化している。わが国でも国立大学法人化に伴い、中期目標・計画の策定が必須となり、公私立大学でも図書館の使命目的設定を行う事例が見られるようになっている。

以上のような背景の下で、大学図書館において図書館自らがその「使命」を確認し、外部に公開・発信すること(使命目的声明=ミッションステートメント)の持つ意義を考察し、明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究方法

本研究ではまず、主にアメリカでの先行研究の内容を検討し、大学図書館とミッションステートメントをめぐる現在までの歴史的な経緯を明らかにした。次にわが国の大学図書館を対象に質問紙調査、

インタビュー調査を行い、国内の現状を把握した。

また、実際の使命目的声明文書入手してその内容を調査し、それらを総合して考察を行った。

4. 結果

4.1 先行研究調査

大学図書館のミッションステートメントに関する先行研究として、国内では蒲生(2002)¹⁾のものがある。また国外では、アメリカの中小大学図書館を対象とした2度の調査(CLIP Note 1985、1999)²⁾、またBrophy(1991)³⁾、Bangert(1997)⁴⁾、Kross(2002)⁵⁾の論文などがあり、それらの内容を検討した。

その結果、アメリカでは1970年代から使命目的を明確化して組織運営を行う取り組みが行われてきたこと分かったが、それは単純に日本がアメリカに遅れているということではなく、経済情勢・社会情勢とそれに伴う高等教育政策の変化によって、「危機的状況」が訪れる時期が異なったことによるものだと考えられた。

4.2 質問紙調査(国内)

国内大学の悉皆調査とし、2007年夏に「日本の図書館2006」の大学図書館名簿を元に、国公私立大学図書館、計704館に質問紙を送付した。これに対して回答は、国立69館(79.3%)、公立45館(60.0%)、私立245館(45.3%)、計360館(51.1%)で、結果として以下の事柄が分かった。

1) 日本での「使命目的声明」への取り組みは、回答館360館中59館(16.4%)と決して多くは無い。設置者別に見ると、国立がある程度高い(40.6%)のに対して、私立では低く(11.4%)、公立ではほとんど取り組まれていない(6.7%)。

* “Mission statement and mission of university library” by Naoto UEDA

また「カーネギー分類」で比較したところ、策定館は博士型大学が多く(44.7%)、修士型大学(23.5%)、専門型(15.2%)、学士型(7.4%)と、大学の研究志向による差が見られる。

2) 策定に関しては、館長と図書館管理職の主体的な関与が大きい。

3) 策定の動機としては「図書館自身の目的の再評価・再構築のため」が一番多い。

4) 策定にかけた時間は1年以内が多い。

5) 広報(公表)方法はインターネットによるものが最も多いが、それでも半分強に過ぎず、「図書館として未公表」としている館が7館あった。

6) 策定していない館が多く理由としてあげたのは「上位の組織の使命声明に含まれるから」である。

7) 回答者全員に「使命目的声明」の意義について尋ねたところ、「とても有意義・有意義」合わせて76.5%と言う高い率で評価された。

4.3 インタビュー調査(国内)

質問紙調査で「使命目的声明」を行っているとした館から、組織規模の異なるA、B2つの大学を選び、インタビュー調査を行った。その結果、A大学図書館では新たな業務を展開していく根拠として、またB大学図書館では、業務委託を進める中で図書館の存在根拠を明らかにするために、使命の確認が行われている状況が見られた。

4.4 使命目的声明文書内容調査(国内)

今回入手できた、31大学図書館の使命目的声明文書の内容を比較検討した。その結果、「学習教育・研究活動支援」「情報資源収集組織蓄積」「情報資源提供」など、従来からの伝統的基本的な図書館業務やサービスの内容が、あらためて記述され、再確認されていることが分かった。

また、「情報リテラシー支援」、「レファレンス」に関して記述されているものを調査したところ、これらは件数が少なく、後者はほとんど取り上げられていなかった。

5. 考察

調査結果を元に、大学図書館におけるミッションステートメントについて、マネジメント、マーケティング、評価の各側面から検討した結果、使命目的目標を定めて組織を運営することは、それぞれの側面で一定の意味を持つことが分かった。

またミッションを基にして組織を運営する経営手法として「ミッションマネジメント」があるが、単にミッションステートメントを策定するだけでなく、マネジメントサイクルを意識して組織を運営することで、その本当の効果を発揮することができると考えられる。

最後に大学図書館がミッションステートメントを策定する意義を再確認するなら、それは大学の一組織である大学図書館を、大学の使命に沿った形で運営していくために不可欠なものであるだけでなく、図書館の利用者は誰なのかを再確認して、大学図書館の使命を実現していくためのツールであると言えるのではないかと考える。

文献

- [1] 蒲生英博. 大学図書館のミッション・ステートメント: 考え方と書き方. 名古屋大学附属図書館研究年報. 1号, 2002, p.31-40.
- [2] Hastreiter, Jamie. et. eds. Mission statements for college libraries. CLIP Note #5, #28. Chicago, Association of College and Research Libraries, 1985, 1999.
- [3] Brophy, Peter. The mission of the academic library. British journal of academic librarianship. Vol.6, no.3, 1991, p.135-147.
- [4] Bangert, Stephanie Rogers. Values in college and university library mission statements. Advances in librarianship, vol.21, 1997, p.91-106.
- [5] Kross, Andrea. "Library mission statements: Effective tools for change." Making the grade. Kelly, Maurice Caitlin. ed. Chicago, Association of College and Research Libraries, 2002.